

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02208

研究課題名(和文) 媽祖崇拜の比較宗教史的研究 民間信仰と諸宗教の融合による東アジア海域世界への伝播

研究課題名(英文) Comparative Religious Research on the Mazu Belief

研究代表者

菊地 章太 (KIKUCHI, Noritaka)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：40231279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は東アジアの海域世界で守護女神として圧倒的な信仰を集めている媽祖を対象に、中国の民間で芽生えたその崇拜が、多様な宗教的伝統と接触を重ねて信仰圏を拡大した過程を比較宗教史の視点から解明することを目的としたものである。民間信仰と諸宗教の融合する実態を積極的に評価することで、媽祖崇拜が変容を重ねつつ朝鮮半島や日本の信仰世界に溶けこんでいく過程を文献研究と現地調査をもとに探求した。これによって、中国沿岸部の民間信仰から始まった守護女神の崇拜が道教の神々の系列に組み込まれて信仰圏を拡大させた足跡を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的な特色として、諸宗教の融合という現象を積極的に評価した点をあげたい。媽祖崇拜を一つのモデルとして考察していくとき、個々の宗教の間に境目を設けることはほとんど不可能であり、こうした事象を欧米型の宗教学の概念をもとに「シンクレティズム」(syncretism)の語で括ることに検討の余地が生じる。民間信仰と諸宗教の融合した姿こそが宗教の社会的実態ではないかとする作業仮説を実証していくことにより、宗教研究の分野に新たな知見を加えることができると思う。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on Mazu, who has gained overwhelming worship as a guardian goddess in the area of sea world in East Asia, and the worship that sprouted in the Chinese private sector expanded the sphere of worship through contact with various religious traditions. The purpose is to elucidate the process from the perspective of comparative religion history. By positively evaluating the actual state of fusion of folk beliefs and some religions, we explored the process of Mazu worship transforming into the Korean Peninsula and the religious world of Japan based on literature research and field research. This allowed us to reveal the footsteps of the worship of the guardian goddess, which began with folk beliefs in the coastal areas of China, and was incorporated into the Taoist gods' lineage to expand the sphere of worship.

研究分野：宗教学

キーワード：媽祖 東アジア 海域世界 民間信仰 比較宗教史

1. 研究開始当初の背景

媽祖は海に生きる人々の守護女神として崇拝されている。南中国の沿岸部から台湾、東南アジアにかけて、さらにアジア以外でも、華人社会があつて海に面したところであれば、今もその崇拝は盛んである。民間における巫女の崇拝がその出発点だが、近世以降に道教の神々の系列に組み込まれていき、道教の最高神である元始天尊にも増して崇拝を集めてきた。したがって媽祖の研究は道教学の一環として行なわれることが多く、地域ごとの研究はすでに歴大な蓄積がある(2013年台湾刊行の『近代媽祖経巻文献与鄭成功信仰資料』全6冊はその集大成である)。日本の学界では道教と民間信仰を切り離して考察する研究姿勢があり(たとえば、小林正美『中国の道教』1998)、それが道教の独自性の解明に大きな貢献を果たしたことは間違いない。

報告者はこうした研究姿勢とは異なる立場から、これまで東アジアにおける道教や仏教の庶民的な信仰の諸相について比較宗教史の視点から考察をつづけてきた。道教は高度な思想体系を備えた宗教だが、その裾野は民間信仰につらなるところも多々あり、さまざまな宗教的伝統と融合することで豊かな信仰世界を形成してきたと考えられる。こうした仮説のもとに東アジア各地の死生観と葬墓制、聖地巡礼などについて考察を試みた結果、諸宗教が融合するところにこそ東アジアの宗教文化の特質がよく現れているのではないかと認識するに至った。

2016年6月に中国人民大学で開催された中日韓国際仏教学術会議で、報告者は日本の媽祖信仰について発表をおこなった。そのとき注目したのは諸宗教の「融合」というありようである。中国南部の民間信仰から始まった媽祖の崇拝は、まず観音信仰と融合して海難の守護神として信仰圏を拡大させ、ついで道教の神々の系列に加えられて全中国的規模でその崇拝が盛んになった。日本でも仏教寺院における合祀に始まり、漁民の民俗信仰と混淆し、日本古来の神々とも結びついた形で、今なお海浜地域で崇拝されていることを報告した。

発表後の討論で論点となったことが2点ある。第1点は諸宗教の融合という視点の有効性についてであり、第2点は朝鮮半島における媽祖崇拝の有無についてであった。討論を重ねていくうちに、この2つの論点には連動する部分のあることが明らかになってきた。通常は妥協的な形態と見なされがちな諸宗教の「融合」というありようを、むしろ宗教の常態として積極的に捉えるならば、媽祖崇拝が朝鮮半島に伝播した可能性についても新たな展望が開けてくるのではないかと、という見通しを得ることができた。そこで帰国後に、この見通しのもとに中国側の史料や日本側の史料に再度あたってみたところ、朝鮮半島だけでなく日本においても、今まで考えられてきた以上に媽祖崇拝の伝播の痕跡を示すものがあるのではないかと考えるに至ったのである。

2. 研究の目的

本研究は、民間信仰と諸宗教の融合を肯定的に評価する視座のもとで、中国近世の媽祖崇拝に焦点をあわせて東アジアの海域世界におけるその歴史的展開と空間的拡大のありようをたどる試みである。15世紀の明代に媽祖を神格とする道教経典が撰述されるが、それに先行して14世紀の元代に媽祖は観音信仰と融合して、海に生きる人々の守護神として定着していた。まずその事実を歴史資料から読み取っていくことをめざした。さらに民間の次元では観音もまた女神として崇拝されており、道教の寺である道観では媽祖を含めた娘々神とならんで観音娘々として祀られていることを現場で確認していくことをめざした。

そのうえで、このような諸宗教の「融合」という事象をひとつのキーワードとして、媽祖の民間での崇拝が伝わった先々でさまざまな宗教的伝統と融合をかさね、それによって信仰圏を拡大していった歴史的な経過を4年間の研究期間内に明らかにしたいと考えた。その中で特に本研究の課題として考察を重ねてきたのは、朝鮮半島への媽祖崇拝の伝播の可能性である。今のところその痕跡はほとんど知られていないが、民間信仰と諸宗教の融合という文脈で捉えることで解明の手がかりをつかもうと努めた。さらに日本への伝播についても、こうした視点から改めて見直すことで、中国の伝統とはもはや隔絶したかに見える民俗事象をも包括できる新たな知見を提示することを最終的な到達目的とした。

3. 研究の方法

比較宗教史の立場から見ると、日本における媽祖崇拝の研究において今までほとんど問題視されてこなかったことがある。それは新たな宗教が伝播していく上でその受容を可能にする信仰的な土壌についての認識である。海外に進出した中国の船員たちは媽祖や観音、もしくは両者が融合した形態の海の守護聖女を崇拝しており、その信仰を東アジア地域にもたらした。そうした伝播が可能だったのは、その地域にすでに庶民が頼みにしてきた何らかの神格があり、その上に新たな信仰が重層的に積み重なっていったことが予想される。たとえ宗教は異なっても、同種の信仰を受け入れていく土壌がそこにあったのではないかと。これは日本では近世初期に顕著に認められる事例である。海の守護神の崇拝が個々の宗教を超えて有する共通性や歴史的接点について探ることは、比較宗教史の研究において格好のテーマとすることができる。媽祖崇拝の諸宗教との融合と空間的拡大を考える過程で、こうした信仰の重層性に注目する必要がある。

以上の問題意識のもとで、媽祖崇拝の歴史的展開と空間的拡大のありようを明らかにしてい

くために、[1] 文献研究と[2] 現地調査を研究期間内のすべての年度で併行しておこなった。[1]については、媽祖崇拜の生成と展開、および朝鮮半島と日本への伝播と変容を根拠づける宗教文献と歴史資料(中国・韓国・日本撰述の漢文文献)を解読して現代語訳を試み、媽祖崇拜の考察に必要な文献的基礎を構築する。[2]については、媽祖像の遺品を国内外に訪ねて写真撮影をおこない、媽祖崇拜の現状を記録し、残された媽祖像の図像学的な分析をもとに民間信仰につながる特徴を把握する。民間信仰と諸宗教が融合をかさねてきた媽祖崇拜の歩みを文献研究と現地調査によって実証していく作業を4年間の研究期間内に完了させるように努めた。

4. 研究成果

本研究は東アジアの海域世界で守護女神として圧倒的な信仰を集めている媽祖を対象に、中国の民間で芽生えたその崇拜が、多様な宗教的伝統と接触を重ねて信仰圏を拡大した過程を比較宗教史の視点から解明することを目的とする。媽祖崇拜の歴史的展開と空間的拡大のありようを明らかにするための基礎作業として、研究期間内に文献研究と現地調査を併行しておこなった。文献研究については、2017年度は漢文文献『天妃顯聖録』を解読し、2018年度は『天妃娘媽伝』を解読し、2019年度は『天后聖母聖蹟図誌』の解読作業に従事した。現地調査については、2017年度は茨城県北部沿岸地域社寺調査をおこない、2018年度は青森県下北半島沿岸地域社寺調査、スペイン南部・ポルトガル西南部沿岸地域教会調査、和歌山県紀伊半島沿岸地域社寺調査をおこない、2019年度は丹後半島沿岸地域社寺調査をおこなった。最終年度にあたる2020年度は、以上の作業を踏まえて研究成果のまとめとその公表をめざした。

第1年度にあたる2017年度は、媽祖伝承に関する基本的な漢文資料を解読し、あわせて日本国内における現地調査を実施した。12世紀宋代に誕生したとされる媽祖の伝記資料はいずれも後世に撰述されたものであり、それを理解するためには宋代の同時代文献をもとにした史料批判が不可欠となる。伝記資料としては16世紀明代撰述の『天妃顯聖録』が代表的なものとして知られるが、媽祖の事蹟に神話的要素が混入した後の産物であることを念頭に置きつつ、現代につながる媽祖の絶大な崇拜を準備した文献として精読したうえで現代語訳を試みた。

現地調査は日本における媽祖崇拜の典型的な事例が残されている茨城県に焦点をしばって実施した。茨城県下では媽祖が在地信仰と接触をかさねた点が特徴としてあげられる。現在は漁業従事者の民俗事象と溶けあっており、北茨城市磯原の天妃社では今も天妃姫の名のもとに媽祖の祭礼が行なわれている。大洗町磯浜にかつてあった天妃社は現在では弟橋比賣神社に改称されたが祭礼はなおも存続しており、開基の東臯心越が住持した水戸市八幡町の祇園寺に媽祖像が安置されていた。以上の現状を写真撮影と聞き取り調査をもとに把握した。

第2年度にあたる2018年度は、媽祖伝承に関する基本的な漢文資料の解読作業を継続し、あわせて日本国内および海外における現地調査を実施した。媽祖の伝記資料としては、『天妃娘媽伝』の解読作業に従事した。そこには媽祖の奇瑞に関して、従来の説話にはない場面が続々と登場しており、ここに至って物語の主要なプロットが出揃ったものと判断できる。『天妃顯聖録』と同様に、現代につながる媽祖崇拜を準備した文献として精読したうえで現代語訳を試みた。

現地調査については、当該年度は報告者が勤務大学における国内特別研究期間に該当するため、時間を有効に活用できた。国内調査のうち、青森県下北半島では東アジア海域世界に伝播した媽祖信仰の北限を踏破し、天妃と呼ばれた媽祖を併祀する神社において中国起源の神格が漁民の民俗信仰として同化していることを確認した。また和歌山県紀伊半島では沿岸地域にある社寺の多くが観音菩薩を祀る聖地であり、近世以降は観音が海難救助の守護者として崇拜されていることを確認した。海外調査においては、ポルトガルのサグレス岬にあるノッサ・セニョーラ・ダ・グラサ礼拝堂で恩寵聖母像を実見したことがこの調査における最大の収穫であった。ユーラシア大陸の西南端に位置するこの土地は16世紀以降の大航海時代に船乗りの崇拜を集めてきた場所であり、守護者としての恩寵聖母の信仰がスペイン南部からポルトガルの大西洋沿岸部に及んでいることを確認した。その信仰は東アジアの海域世界にもたらされており、媽祖がさまざまな民間信仰を取り込みつつ海の守護神として崇拜された存在であることを顧みたと、両者の接点を比較宗教史の視点から解明していくことが次の課題となった。

第3年度にあたる2019年度は、媽祖伝承に関する基本的な漢文資料の解読作業を継続し、あわせて日本国内における現地調査を実施した。媽祖の伝記資料としては、『天后聖母聖蹟図誌』の解読作業に従事した。この書物は清朝下において開板をかさねたため流通の範囲がきわめて広く、これ以降は物語自体が拡充する余地がなくなったほどである。そのため媽祖説話の長期にわたる発展はここで終熄したと判断できる。媽祖崇拜における重要文献のひとつとして精読したうえで現代語訳を試みた。

現地調査については、丹後半島沿岸地域の社寺における海の守護神崇拜の実態を明らかにする調査を実施した。東アジア海域世界に伝播した媽祖崇拜の基盤となる海神信仰の広範な伝播地を踏査し、海神(わたつみのかみ)のような海の神格が種々の信仰習俗と混淆しつつ盛んに祭祀されていることを現地を確認した。民間信仰における諸宗教の融合の実態解明へ向けて、本研究の到達目標である比較宗教史的考察に大いに活かすことができた。

第4年度(最終年度)にあたる2020年度は、これまでの作業を踏まえて研究成果のまとめとその公表をめざした。まず「中世・近世における道教信仰の伝播 媽祖崇拜の拡大を手がかりに」と題する単著論文を執筆し、佐藤文子・上島享編『宗教の受容と交流』日本宗教史第4巻(吉川弘文館)に掲載した。同じく「媽祖と海域の文化」と題する単著論文を執筆し、小峯和明・シ

ラネ=ハルオ・金文京、染谷智幸編『はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』東アジア文化講座第1巻(文学通信)に掲載した。さらに『東アジアの信仰と造像 媽祖崇拜の比較宗教史的考察』(第一書房)と題する単著を刊行した。以上の研究成果刊行物において、中国沿岸部の民間信仰から始まった航海の守護神が、道教の神々の系列に組み込まれて信仰圏を拡大させ、変容を繰り返しつつ日本の民俗世界へ溶けこんでいった足跡を比較宗教史の文脈において明らかにすることができた。

報告者は4年間の研究期間を通じて、中国南部の民間で芽生えた媽祖の崇拜が、多様な宗教的伝統と接触を重ねて信仰圏を拡大した過程を検討してきたが、その研究途上で新たな課題が浮かび上がってきた。そのため、より広範な地理的視座の必要性を認識するに至ったのである。媽祖の崇拜が東アジア各地に伝播しはじめた16世紀は、世界史上の大航海時代にあたり、南ヨーロッパの宣教師がこの地に頻繁に渡来していた。キリスト教世界における海の守護聖母の崇拜も東アジアに伝播しており、媽祖崇拜との融合あるいは混淆も従来予想していた以上にはるかに盛んであったことが明らかになった。そこで今後は、南ヨーロッパのキリスト教信仰を視野に入れたうえで、広域的な東西文化交流の実態を現地調査と文献研究をもとにたどり、一地方の崇拜対象から出発した媽祖が巨大な信仰圏を築くに至った経過を明らかにしたいと考えている。そのうえで、媽祖崇拜の伝播の過程における東西交渉の足跡を比較宗教史的に解明することをめざして研究を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊地章太（単著）	4. 巻 1
2. 論文標題 「媽祖と海域の文化」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小峯和明・シラネ=ハルオ・金文京、染谷智幸編『はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流』 東アジア文化講座第1巻（文学通信）	6. 最初と最後の頁 159-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地章太（単著）	4. 巻 4
2. 論文標題 「中世・近世における道教信仰の伝播 媽祖崇拜の拡大を手がかりに」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佐藤文子・上島享編『宗教の受容と交流』日本宗教史第4巻（吉川弘文館）	6. 最初と最後の頁 275-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地章太（単著）	4. 巻 -
2. 論文標題 「媽祖信仰の生成と伝播 中国宗教の日本文化への浸透」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学井上円了記念研究助成報告論文集『日本文化の背景となる仏教文化の研究』（東洋大学東洋学研究所）	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地章太（単著）	4. 巻 17
2. 論文標題 「北限の地から媽祖崇拜を考える 民間信仰と道教の連続性」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『中国哲学論集』（名古屋大学中国哲学研究会）	6. 最初と最後の頁 145-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地章太 (単著)	4. 巻 55
2. 論文標題 「媽祖説話の生成と変容」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東洋学研究』 (東洋大学東洋学研究所)	6. 最初と最後の頁 305-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 菊地章太
2. 発表標題 観音信仰 ユーラシアから日本へ
3. 学会等名 第148回奈良学文化講座 (東海旅客鉄道株式会社主催) メルパルクホール東京 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊地章太
2. 発表標題 媽祖崇拜の北限をたどる 東アジア海域世界における信仰圏の拡大
3. 学会等名 東洋大学東洋学研究所公開講座 (東洋大学東洋学研究所主催) 東洋大学白山校舎 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 菊地章太 (単著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 第一書房	5. 総ページ数 218
3. 書名 『東アジアの信仰と造像 媽祖崇拜の比較宗教史的考察』	

1. 著者名 菊地章太 (単著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東洋大学出版会; 丸善出版 (発売)	5. 総ページ数 260
3. 書名 『位牌の成立 儒教儀礼から仏教民俗へ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------